○開催概要

緑のボランティア
助成セミナー2020 in 大阪

【日 時】2020年2月16日（日）14：00～18：30　【場 所】近畿中国森林管理局 4F大会議室

プログラム

14：00～14：10　開会 あいさつ ・ 趣旨説明
（公社）国土緑化推進機構　　常務理事　瀬戸 宣久

14：10～15：10　◆ 事例報告

1 公民連携で取り組む里山保全の担い手拡大
齊藤 哲実（茨木里山を守る会 事務局長）

2 約20年続く学校とNPOの協働による森林ESD
～年間指導計画に位置付け、
教科等との連動に考慮した金閣小学校の取組～
磯野 文彦（京都森林インストラクター会）

3 "森のようちえん"の保護者が主体となった
森林NPOの設立と森づくり・木づかい活動
小林 明子（森の暮らしデザイン集団kicoris）
清水 環（森の暮らしデザイン集団kicoris）

15：10～15：20　休　憩（10分）

15：20～16：00　◆ 2020年度「緑の募金」「緑と水の森林ファンド」助成プログラム紹介

16：00～16：45　◆ 質疑応答・ディスカッション

16：45～17：00　休　憩（15分）　※1F 森林のギャラリーに移動

17：00～18：30　◇ 助成金個別相談会／ポスターセッション・情報交換会

【主催】公益社団法人国土緑化推進機構
【共催】林野庁近畿中国森林管理局、公益財団法人大阪みどりのトラスト協会

○出席者数　87 名（発表者、運営スタッフを含む）

○開会 あいさつ ・ 趣旨説明

（公社）国土緑化推進機構　常務理事　瀬戸 宣久

○事例報告

①公民連携で取り組む里山保全の担い手拡大　茨木里山を守る会 事務局長　齊藤 哲実氏

茨木市里山センターが行っている市民や子どもたちを対象とした様々なイベントや体験講座の様子、それらの活動を行うための担い手育成の取り組みについて報告がありました。

②約 20 年続く学校と NPO の協働による森林 ESD　～年間指導計画に位置付け、教科等との連動に考慮した金閣小学校の取組～　　京都森林インストラクター会　磯野 文彦氏

2001 年から続いている京都市立金閣小学校における総合学習での森林活動支援の取り組み、さらに、教科等との関連付けの試みについて報告がありました。

③“森のようちえん”の保護者が主体となった森林 NPO の設立と森づくり・木づかい活動
森の暮らしデザイン集団 kicoris　小林 明子氏、清水 環氏

活動拠点のある菰野市の豊かな自然環境や景色、子どもたちが森のようちえんを卒園した後も保護者たちが集まって里山の手入れを行い、里山からの材を活用したプロダクトの製作・販売などを展開している様子が紹介されました。このような活動を通して、地域の森が良くなり、自分たちの生活が豊かになれば良いとの考え方に、共感した参加者が多かったのではないでしょうか。

○2020 年度「緑の募金」「緑と水の森林ファンド」助成プログラム紹介
（公社）国土緑化推進機構　募金企画部長　日高　瑞記

（公社）国土緑化推進機構　ファンド助成金担当部長　井上　達也

○質疑応答・ディスカッション（敬称略）

Q　参加者の年齢層はどうなっているのか。どういう方がチェーンソーの講習を受けられているか。

A　参加者の年代は 20 歳から 80 歳ぐらいまで。平均は 67～68 歳というところ。女性が 2 割ぐらい。チェーンソーの講習は、有資格者 70 人ぐらいが受けている。刈払機も同じぐらい。（齊藤）

Q　各講座・講習会の参加者の募集はどのようにしているか。

A　市の広報を活用している。（齊藤）

Q　市の理解協力があるというのは心強いと思う。協力をどのように得ていったのか。

A　市長が森の荒廃を憂いていたのが大きかった。市長が変わっても、講座に参加するなど、お金を出すことを渋っていない。（齊藤）

Q　学校の取り組みについて、指導要領との連動というのは、意識してつくっているのか、結果として連動しているのか。学校との連携・相談でプログラムをつくっているのか。

A　当初は指導要領との連動はなかった。最初は 3 年生だけだったが、5 年生が参加するようになって、社会科の林業と連動を意識するようになった。先生との相談については、私たちでプログラムをつくってお示しし、学校側が了承している。先生方からの希望があれば言ってくださいとメールで伝えるが、全部お任せしますといわれる。先生方は森にあまり詳しくないので、できればお任せしたいという感じ。中には熱心な先生がいて、子どもたちの興味に応じてテーマ別に案内してほしいというリクエストがある場合もある。（磯野）

Q　自然と触れ合う学校のイベントが安全管理の問題でなくなったことがある。教育の現場で森に触れあう必要性をどのように考えて、どう伝えているか。

A　山で遊んだことがない人は、子どもを山に連れて行かない、今は山で遊んだ経験がない親が多いので、学校で全員連れていくのがいいのではないか。それをどのように伝えていくか、という点については、積極的には発信できていない。子どもたちは山での時間を楽しみにしている。だから、子どもたちを山に連れ出すことは続けていきたいと思うし、お声がけいただければご案内したいと思っている。（磯野）

Q　森のようちえんを体験した子どもたちがどのように成長し、どのような効果があったと感じているか。

A　正直なところ、お答えすることが難しい。その子その子で全然違ので、森のようちえんの効果なのか、その子の成長の現れなのかわからない。ただ、野山、川、田畑で遊ぶことで体力がついたとか、自然を大事にするようになったとかいうレベルよりも、もっと深い心に残る、体に

残るものがあってほしいと願っている。

私は、森の風ようちえんでの生活がなければ、今のこの活動はしていなかったと思う。ほかの親御さんも、より良いものを、丁寧な暮らしをと、いろんな思いを持ってこられている。家庭環境も子どもの成長にとってはとても大きい。その過程をつくっていく、家の中をつくっていく親の意識っていうのは、森のようちえんに関わっているのと関わっていないのとでは、ずいぶん違うのではないか。子どもはちょっとわからないが、親にはすごく効果があると思う。（小林）

Ｑ　山で間伐した木材資源をどのように活用しているか。活動経費はどうしているか。活動助成は受けているか。

Ａ　利用できるものは里山センターに運んで、30 センチの丸太まで引ける製材機で板、角材、あるいは丸太など学校の教材用に加工して利用している。炭窯では、1 年に 15 窯焼く。

団体の運営には、保険料が年間 10 万円、通信費が 10 万円、機械の修理代 20 万円、勉強会の経費などを入れると全部で 70 万円ほどかかる。100 人の会員から 7000 円ずつは貰えないので、年会費は 3000 円にしている。あとの 4000 円分は、材木を製材して売ったり、アドプトフォレスト（企業ＣＳＲ）の受け入れに係る収入などをあてて、年間 70 万円の経費を賄っている。（齊藤）

Ａ　ほとんどが手鋸できるので、販売できるほどの材は出てこないし、切った木は、ベンチや階段をつくるのに使っている。ふれあいの森は国有林なので、切った間伐材は販売できない。

活動経費は、企業のＣＳＲの森づくり活動が増えているので、その活動で得られる資金が大きく、活動資金が足りていないということはない。会員には、活動に参加した時の交通費と日当（弁当代ぐらい）は払うようにしている。それは、その年の収入によって決めているが、去年は 700 円＋交通費を年間まとめて総会の時に払う。得た資金は、鋸やヘルメット、ほかに必要なものを買うのに活用している。（磯野）

Ａ　材の利用に関しては、モノづくりの好きなメンバーが枝の皮をむいて、カトラリーやアクセサリーを作って販売したり、ワークショップでヒノキの葉っぱを使ったスワッグ（壁飾り）をつくるのに利用している。製材する環境が今のところないので、それが課題でもある。今は、使わない枝や幹は現場に残してきている。

助成金は貰ったことがない。私たちメンバーが年会費を払うのと、年に 1～2 回森の先生の講座からのお金や、ものづくりワークショップの参加費などで、細々と活動している。（小林）

Ｑ　森のことを知らない普通の人に、森について関心を持ってもらうきっかけをつくるにはどうしたらよいか。

Ａ　山が荒れているのを気にしない人はいないと思う。見ればわかるから、山に来てもらえる環境・機会をつくる、お知らせするということが一番大切だと思う。小学校で小さいころからの種まきをしたり、大人に工作の楽しさを勉強してもらったりしている。小学校の場合は、校長会というのがあるので、その席で里山センターに行くと課外授業ができるということをＰＲしてもらっている。このように行政と組んで、校長会などの組織を通じてＰＲするのが大切だと思う。（齊藤）

Ａ　「興味がない普通の人」には子どもたちが該当すると思う。山に行って楽しい、森の生き物に触れて楽しい、そういう体験をしてもらうことによって、保護者の方にも伝えてもらうことが

考えられる。企業の森づくり活動の一環で社員を対象とした間伐体験とか、森林整備体験などに親子で参加するようなイベントや親子を一般公募して自然観察をするイベントの案内もしている。興味を持ってもらうことと、興味を持ってくれた人には、また来たいと思ってもらえるような内容をしていくしかないかと思っている。（磯野）

A　先ほどのスライドの最後の方で紹介したが、森で活動作業するだけではなく、街に出かけてイベントに来てくださった人に、生活で使えるように作ったものを使うことによって、この木がどこから来たのか思いを馳せてもらえるようなことを手掛けて、伝わるようにしていきたい。今はまだそういう段階で、森のことをあまりよく知らない関心のない人たちに働きかけていくのか、関心はあって何かしていきたいという中間点の人たちがたくさんいると思うが、そういう人たちに対して発信していくべきなのか、それもまだ私たち自身が迷っていて、悩んでいる最中だ。（小林）、

Q　地域や学校、行政と連携を取るときに気を付けていること、配慮していること、他の団体と連携するときに気にかけていることは何か。

A　森林所有者との関係、森林の境界がどこからどこまでかを一番気にしている。活動中の事故で、コナラを炭材用に切ったら、落ちて畑のイノシシの電柵の本体を壊してしまうということがあった。安全面と森林所有者の理解が一番大事。（齊藤）

A　学校の場合、安全面に一番気をつけている。2010～11 年にナラ枯れによって立ち枯れた木や、2018 年の台風による倒木・懸かり木・ぶら下がった木などがあるので、山を歩くときは、それらを避けて歩いたり、落枝に注意しながら通行するなど、注意するようにしている。（磯野）

A　地域の方々との連絡や挨拶は特に大切にしている。田舎だし、つながりとかいろいろあるので。町との関係では、新年度から新しい町長になって、「町長と語ろう」という企画を打ち出してきてくれたので、来月の頭に私たちが町長のところに話をしに行く約束をしている。（小林）

Q　学校と連携すると平日の活動や打ち合わせが多いと思うが、本業との両立はどのようにしているのか。年間どのくらいこの活動に費やしていますか。

A　始まった当初は、仕事を終えて夕方から打合わせをするということが多かったが、最近はメールでのやり取りがほとんど。だいたい聞くことは決まっているので、去年のメールを参考にしてやりとりしている。本業との両立は今のところ問題ない。有休を活用している。下見に行くときは、土日のどちらかに先生に来てもらって、会員と一緒に下見をする。その日に来れない会員は別の日に設定している。平日に活動するのは、下見も加えて年間 15 日くらい。プラス巣箱かけの営巣状況の確認があるので、年間 20 日ぐらい活動している。20 年ぐらい山に行って毎回下見をしているが、全く飽きることがない。今もいろんな発見があり、これからも続けていきたい。（磯野）

－以上－